

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：54401  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22520219  
 研究課題名（和文） 江戸期の漢文遊記の研究—懐徳堂を中心に  
 研究課題名（英文） A Study on Travel Literature written in Classical Chinese in the Edo Period—Focusing on Kaitokudo School  
 研究代表者  
 湯城 吉信（YUKI YOSHINOBU）  
 大阪府立大学工業高等専門学校・一般教養科・教授  
 研究者番号：90230614

### 研究成果の概要（和文）：

江戸時代の大阪の漢学塾、懐徳堂関係者は、各地を訪れ、多くの紀行文を残している。本研究では、大阪大学図書館懐徳堂文庫、大阪府立中之島図書館などに所蔵されている懐徳堂関係者の旅行関係資料を全面的に調査した。その中、中井履軒他筆『環湖帖』、中井竹山著『東征稿』、中井竹山著『西上記』、加藤景範著『観濤録』について、翻刻、注釈、および詳細な分析を行い、その結果を公表した。本研究により、琵琶湖行、中井竹山の江戸行、加藤景範の鳴門行の様子を明らかにできた。

### 研究成果の概要（英文）：

The aim of this study is to research travel literature of the Edo period especially that of Kaitokudo school written in classical Chinese. Kaitokudo was a school of Chinese classics founded in Osaka. Teachers and students of Kaitokudo visited many places and left many traveler's journals in classical Chinese. This research introduces Kankochō—by Nakai Riken etc., Toseiko, Seijoki—both by Nakai Chikuzan, Kantoroku—by Kato Kagenori. I also reprinted above four books and made annotation of them.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	1100,000	330,000	1430,000

### 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：漢文学、遊記、旅行記、懐徳堂、中井履軒、中井竹山、加藤景範

#### 1. 研究開始当初の背景

日本における漢文遊記は中国の遊記の影響下に成立したが、漢文の間に漢詩を挟むなど日本独自の点も存在する。だが、その過程はまだ十分に研究されていない。

懐徳堂は、関西を訪れる文人は必ず立ち寄

ったと言われ、大阪の学問・文芸の中心であり、有名な文芸サロン、混沌社とも密接な繋がりがあった。

懐徳堂関係者は盛んに各地を訪れ、多くの紀行文を残した。それらの資料は、今も大阪大学図書館懐徳堂文庫や大阪府立中之島図書館に多く保管されている。

これらの資料は、懷徳堂関係者の交流や思想を知る上でも、当時の現地の様子や旅の様子を知る上でも貴重な資料であるが、これまでは十分に研究されてこなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、江戸期の大阪の漢学塾懷徳堂を中心にその成立過程の一斑を明らかにすることを目的とする。遊記は、文芸・文体史以外にも、歴史地理学や思想史の観点からも非常に重要である。本研究では、懷徳堂学派の遊記の実態を明らかにすることにより、懷徳堂学派の行動や思想の一斑を明らかにし、大きくは江戸期の歴史地理学に対して重要な資料を提供することを目的とする。

## 3. 研究の方法

大阪大学図書館懷徳堂文庫、大阪府立中之島図書館などに残された旅行関係資料を調査し、その解説および分析をする。また、現地調査を行い、当時の人の着眼点、訪問地の古今の変化を確認する。

## 4. 研究成果

本研究では、江戸時代の懷徳堂関係者の旅を研究した。

江戸時代、庶民の間でも旅行が盛んになった。大阪にあった漢学塾である懷徳堂の関係者も多く土地を訪れ、多くの記録を残した。大阪大学懷徳堂文庫や大阪府立中之島図書館などには、懷徳堂関係者の旅行関係の資料が大量に残されている。本研究では、その内容の一斑を紹介した。特に、『環湖帖』、『東征稿』、『西上記』、『観濤録』に焦点を当て、各書について、翻刻、注釈、論考を発表した。また、訪問地の現地調査もを行い、古今の異同も明らかにした。

### (1) 『環湖帖』について

安永九年(1780)夏、中井竹山・履軒、加藤景範、岩崎象外らは舟で琵琶湖を巡った。その思い出を帖物に仕立てたのが『環湖帖』である(成書は天明八年(1788))。『環湖帖』は象外の画に、竹山・履軒の漢詩、景範の和歌がそれぞれ自筆で添えられた豪華な帖物である。現在、大阪府立中之島図書館に所蔵されている。本報告書では、現地調査の結果も含め、その内容を分析した。

彼らの旅の背景には、白木屋の大村彦太郎氏という支援者の存在があり、その恩恵を被り、琵琶湖を丸子船で一周することができた。

彼らの選定した十一地点は、近江八景、琵琶湖八景と比較すれば、その特徴がより明確

になる。

近江八景は、「比良暮雪」、「堅田落雁」、「矢橋帰帆」、「粟津晴嵐」、「唐崎夜雨」、「三井晚鐘」、「瀬田夕照」、「石山秋月」の八つの景色を言う。中国の瀟湘八景(中国湖南省にある瀟水と湘水の流れを集める洞庭湖の名勝)に擬して、琵琶湖の景色を選定したものである。成立は定かではないが、近衛信尹(1565~1614)の近江八景和歌が始まりではないかと言われている。江戸時代に盛んに詠まれ、近江八景を題材とした美術作品も多く作られた。地点の選定は湖南に偏り、季節を含む点に特徴がある。

一方、琵琶湖八景は、「夕陽 瀬田石山の清流」、「煙雨 比叡の樹林」、「涼風 雄松崎の白汀」、「暁霧 海津大崎の岩礁」、「新雪 賤ヶ岳の大観」、「深緑 竹生島の沈影」、「月明 彦根の古城」、「春色 安土八幡の水郷」の八つの景色を言う。昭和二五年、琵琶湖が国定公園になるのを機に、昭和二四二四年に滋賀県観光協会により選定された。地点は琵琶湖全域に散らばる。観光開発が目的のため、地域のバランスを重視し、よく言えば網羅的だが、悪く言えば様々な要素を取って付けたような選定だと言える。

以上の古今二つの八景に比べ、『環湖帖』の十一地点はどのような特徴を持つだろうか。『環湖帖』の十一地点は、「三井寺」、「真野浦」、「楊梅滝」、「鎧岩」、「白髭神社」、「海津」、「賤ヶ岳」、「伊吹山」、「彦根城」、「安土山摠見寺」、「長命寺」であった。大津から時計回りに琵琶湖全体に散らばった選定になっている。

近江八景とは重なる場所は三井寺だけで、しかも取り上げるものは「晚鐘」(近江八景)と「観音堂からの眺望」(『環湖帖』)という違いがあり、同一の選定は全くないと言える。

一方、琵琶湖八景とは、海津(取り上げるものは違う)、賤ヶ岳、彦根の三箇所が重なる。また、「安土八幡の水郷」(琵琶湖八景)と「長命寺」(『環湖帖』)も湿地を取り上げる点では重なる部分がある。また、地点が琵琶湖全体に分布している点は両者の大きな共通点である。

ただし、序に述べるように、『環湖帖』の選定は、人に知られていない仙境を求める点に特徴がある。三井寺と長命寺は実は西国三十三箇所を選ばれる有名な場所だが、履軒が詠んでいるのは寺そのものではなく、そこからの眺望やそこへ至るアプローチである。この点、観光開発を目的とする琵琶湖八景とは根本的に異なる。

また、『環湖帖』には近江八景・琵琶湖八景に附されている季節がない。これは旅の回顧録であるため当然かもしれない(すべて夏)。ただし、海津、賤ヶ岳、摠見寺、長命

寺はいずれも日暮れを詠ったものである点が特徴的である。旅愁を誘う時間であったのであろうが、その日の移動を終え、ほっとする時間であったことも関係するだろう。

## (2) 『東征稿』『西上記』について

明和九年(1772)旧暦四月、中井竹山は近江宮川藩主堀田正邦に随って江戸に赴いた。『東征稿』はその往路の様子を漢詩で記した紀行である。一方、『西上記』は、旧暦八月、江戸を經ち、二十六日かかって大坂に着くまでの復路の様子を表した漢文紀行である。両書は竹山の旅の様子や交流関係を知る上で貴重な史料である。

復路、竹山は、「迷惑年(めいわくねん)」ともじられた明和九年の風水害に遭遇した。『西上記』はその様子を克明に記している点も貴重である。そして、そのような経験に遭遇したことは、期せずして、竹山に文才を發揮する機会を提供することになった。

この竹山の江戸行について、西村天因『懷徳堂考』は、旅の目的は定かではないとしつつも、堀田侯を頼った就職活動ではなかったかと推測している。

一方、田中佩刀「中井竹山と「東征稿」」は、竹山の旅は文人として旅を楽しむのが目的であったとする。

それに対して、筆者は、竹山の江戸行は、直接的には、堀田侯から竹山への褒美であったと考える。

江戸行の前年の明和八年(1771)、竹山は当時二条城在番であった堀田正邦から『大日本史』の筆写を依頼された。そして、懷徳堂関係者三七名で、同年十一月初旬に作業を開始し、翌二月末に完成、一部を堀田侯に献上し、一部を懷徳堂に留めた。竹山の江戸行はこの作業完成の褒美と考えるのが自然であろう。ただ、竹山にとっては交流を広げる絶好の機会ともなったであろう。

『東征稿』の詩を見ると、竹山が手を尽くして自らの文才をアピールした様子を確認することができる。

『東征稿』『西上記』は、執筆後、八十年余りを經た嘉永六年(1853)になってようやく刊行された。だが、竹山は、『東征稿』『西上記』執筆の翌年、安永二年(1773)には、すでに、江戸で交流を持った尾張藩の南宮岳(大湫)に序を、細井徳民(平洲)に評を、堀田侯ゆかりの佐倉藩の渋井太室(子章)に跋を書いてもらっている。この点にも、竹山の『東征稿』宣伝工作を確認することができる。

往路では堀田侯の威光を借りスムーズな旅を満喫できた竹山であったが、復路も三人の武士と同行し、関所や渡しでは町人ではあり得ない待遇を受けることができた。(特に

金谷で大坂定番の保科侯と合流してからは。)

ただ、風水害に道を閉ざされ、旅は困難を極めた。『西上記』は明和九年の風水害を記録した貴重な歴史記録である。竹山自身、跋文で「風火之艱、道塗之變、後來有<sup>ル</sup>モ<sup>ニ</sup>草<sup>ス</sup>レ<sup>ル</sup>史<sup>ヲ</sup>者<sup>ニ</sup>、亦必不<sup>レ</sup>措<sup>キ</sup>是<sup>ノ</sup>編<sup>ヲ</sup>它<sup>ニ</sup>求<sup>メ</sup>上<sup>リ</sup>」

(今後この暴風雨と沿道の被害状況を歴史に残そうと思う人がいれば、まずこの資料を見ることになるだろう)と述べている。

この風水害は、竹山にとって才能を發揮する場になった。『西上記』を見ると、竹山が、紀実(事実記録)の才、取材能力(沿道の人への聞き込みなど)、洞察力(木の倒れ方かた風の様子を推測するなど)、行動力(品川で芸者を指揮して災害に対処するなど)を發揮した様子が見える。

ただ、このような災害の中、竹山らは江ノ島などの観光に訪れ、その様子(素潜りなど)を記録している。また、事実だけでなく故郷を想う情や堀田侯をしのぶ気持ちを表現している箇所もある(乙亥の日)。また、自らの文学の素養を披露している箇所もある(戊寅の日など)。品川の記述では、災害の様子の上に、翌日の静かな様子を記述するなど、動と静とが巧みに配置されている。

以上のように、『西上記』では、現代の映画の構成のように、様々の要素が配置を考えて巧みに織り交ぜられている。竹山の心配りが感じられよう。

末尾に見える、帰坂後の周囲の人の発言からも、『西上記』は『東征稿』とともに、竹山がその文才を發揮し、それを周囲にアピールするための作品だったことがわかる。

## (3) 『観濤録』について

加藤景範は、無類の旅行好きであった。頻繁に旅行に出かけ、多くの紀行を残している。

『観濤録』は、景範が天明元年(1781)春(旧暦三月二五日～四月一日)の鳴門行を記した紀行文である。同書は歌日記の形式を取るが、旅の様子が克明に記録されており、歴史史料として価値が高い。本研究では、景範の和文紀行の代表作として、『観濤録』の内容を、これも現地調査の結果を添えて紹介した。

作者の加藤景範(1720～1796)は、江戸中期の歌人であり国学者でもあった。通称小川屋喜太郎、売薬業を営んだ。字は子常、号は竹里。多くの著作を残し、甥に出版社を作らせ、出版も盛んに行った。景範は漢学塾であった懷徳堂でも学び、漢詩も残している。「はじめに」に述べたように景範は旅行好きで多くの土地を訪れ紀行をしたためていた。鳴門もいつか訪れたいと思っていた。実現した天明元年には、六一歳になっていた。

有賀長収(1750～1818)。有賀家は、代々

歌学の家であったが、長収の父、長因は京都から追われた。その長因を大坂に迎えたのが景範であった。景範は、長収の師となり歌を指導した。有賀家は、徳島藩中老生駒氏の歌の師として代々頻りに徳島を訪れていた。

『観瀾録』の鳴門行が実現したのも長収のお蔭であった。天明元年には、三一歳であった。

古林相如、字正民、号槐菴（拙稿「『懷徳堂会餞詩巻』 訳注一中井履軒京都市の送別詩」『中国研究集刊』三四号（大阪大学中国学会、2003年）参照）。古林家は医者であったが和歌も嗜んだ。子は尚剛（～1812）、孫は正見（～1852）。正見も有賀長鄰と交流があり、和歌を嗜んでいた（中野操監修『医家名鑑』（解説編）82～83頁、前田書店、1970年）。帰路、大坂が近くなると、古林家の船印があちこちに見えたことあり、古林家の繁栄振りを窺うことができる。また、淡路に知り合い（使用人）が多くいたことがわかる。

景範は実に生き生きと旅の様子を描いている。紀行作家としての彼の技量は懷徳堂関係者の中でも群を抜いている。そして、景範が残した多くの紀行の中でも、本章で紹介した『観瀾録』は、その詳細な描写技法・描写内容において注目すべきものである。

江戸時代、旅は簡単にはできなかつた。景範の鳴門行が可能になったのも人脈に恵まれたからである。徳島の生駒家に通じていた有賀長収がいたからこそ、徳島藩の参勤交代に同行でき、徳島や撫養に招かれることができた。また、古林正民の使用人が淡路（生穂）に多かつたお蔭で、淡路でも歓待を受けた。特権を享受した旅であったと言える。

ただ、楽な旅であったとは言えない。景範の記述から、現代の旅では味わわない苦勞（それには風雅も伴ったが）があつたことが確認できる。また、歓待の見返りとして、景範らは必ず歌を所望されている。『観瀾録』には、全部で六〇首ほどの和歌と二首の漢詩が収められている。文人の旅も楽ではない。

また、『観瀾録』で注目すべきは、記されている当時の状況・風俗であろう。参勤交代の船の様子や帰りのもやい船での宴会、古林家の船印のこと、困難を伴った鳴門見物の様子、鳴門の塩田・わかめ取り、鳴門・淡路島の馬の放牧、淡路島での金刺漁などいずれも貴重な歴史資料となっている。現地を訪ねることにより、変わった部分と変わらない部分（不易流行）とを感じ取ることができたことは、筆者にとっても貴重な経験であった。

以上の成果により、懷徳堂学派の旅の様子、交流関係が明らかになり、翻刻・注釈を公表することで、資料を世の中に広く紹介することができた。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 湯城吉信、『観瀾録』の旅—加藤景範の鳴門行、上方文化研究センター研究年報（大阪府立大学上方文化研究センター）、査読有、14号、2013、1-22
- ② 湯城吉信、『環湖帖』の旅を読む、懷徳（懷徳堂記念会）、査読有、81号、2013、23-38
- ③ 湯城吉信、『西上記』に見る明和九年の風水害、大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要、査読有、46号、2012、1-12
- ④ 湯城吉信、『東征稿』に見る中井竹山の江戸行、大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要、査読有、45号、2011、15-22
- ⑤ 湯城吉信、『環湖帖』の旅を訪ねる、懷徳堂研究（大阪大学懷徳堂研究センター）、査読有、2号、2011、15-39  
<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/24661>

〔学会発表〕（計2件）

- ① 湯城吉信、江戸時代の大阪人の旅—鳴門渦潮見物、大阪府立大学工業高等専門学校公開講座、2012年12月1日、大阪府立大学工業高等専門学校
- ② 湯城吉信、江戸時代の大阪人の旅—琵琶湖一周旅行、大阪府立大学工業高等専門学校公開講座、2011年10月22日、大阪府立大学工業高等専門学校

〔図書〕（計1件）

- ① 湯城吉信、江戸期の漢文遊記の研究（科研費報告書）、2013、162  
\* 上記、雑誌論文以外に、
  - 1、「中井竹山『東征稿』翻刻・注」
  - 2、「中井竹山『西上記』翻刻・注」
  - 3、「水田紀久先生蔵『東征帖』」を収める。

〔その他〕

ホームページ等

湯城吉信のHP

[http://www7b.biglobe.ne.jp/~nobu\\_yuki/](http://www7b.biglobe.ne.jp/~nobu_yuki/)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

湯城 吉信 (YUKI YOSHINOBU)

大阪府立大学工業高等専門学校・一般教養科・教授

研究者番号：90230614